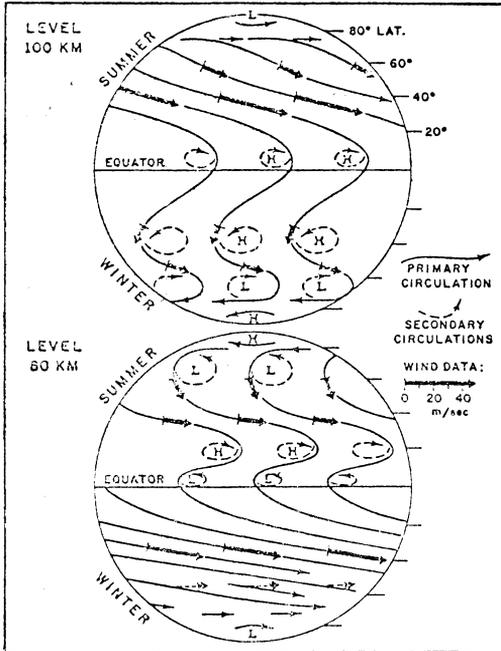


むすび

以上、広大な領域に亘る review を試みたが、これは到底個人のよくするところでなく、精粗、新旧取りまぜて、記述もまた雑然となった。今日各分野にはそれぞれの優秀な研究者が日本に輩出しつつあるが、筆者は筆者なりに一応の超高層大気全般に亘るパースペクティブを持つ必要があって、極めて歪められたものながら、読者にとって部分的に何らかの参考になれば望外である。嘗って気象学界の有数刊行物の一つであった AMS の Journ. Meteor. が Journal of Atmospheric Science と改題して既に多くの巻を重ねたが、そこにはそれなりの理由があった。筆者の浅学はおき、気象学が既にして大きく変貌しつつあることは既定事実といえよう。

なお、拙文中に多数の図を借用したことについては、著者各位に厚くお礼を申し上げたい。スペースの関係で引用文献は省略したが、図についてはすべて明記した所以である。日本の気象ロケットについては、特に、これが発足に関係した方々に、その文献、資料については、東大宇宙研ならに本庁高層課に謝意を表す。重ねてまた、拙稿執筆に当って直接の機縁となった方々、もし氏名を挙げる事が許されるなら、米航空宇宙局前田嘉一氏、天気編集委員三崎方郎氏、気象ノート編集委員神山恵三氏、高層課長有住直介氏に、そして、討論を通じて種々示唆を与えられた気象研高層物理研究部の各研究者諸氏にお礼を申し上げて、拙稿を擱く。



第25図 (b) 80~100km での大気循環模図 (Kochansky, A., JGR 68 213, 1963)

象ロケットと Na vapor による風の分布, 他は熱圏下部の circulation model である。

第4回 理工学における同位元素研究発表会

— 論 文 募 集 —

気象学会ほか関係諸学・協会の共同主催で、標記の研究発表会を開催いたします。この研究発表会の目的は、異なった専門分野の研究者が一堂に会し、同位元素および放射線の利用の技術を中心とした研究、およびその技術の基礎となる研究の発表と討論を行ない、各専門分野間の知識と技術の交流を図ろうとするものであります。

気象学会会員の参加を切望します。詳細についてのお問合せは気象庁測候課村山信彦（東京 212-8341内線 356）へおねがいします。

会 期 昭和42年4月18日（火）～20日（木）

会 場 国立教育会館（東京都千代田区霞ヶ関3の4、文部省隣）

発表申込 所定の申込書（1件1通）によりお申し込み下さい。所定の申込書は、下記あて請求して下さい。

東京都文京区本駒込二丁目28番45号（理研内）日本放射性同位元素協会内

理工学における同位元素研究発表会運営委員会 電話 東京 946局 7111 番（代表）

発表申込締切：昭和42年1月41日（火）必着

講演要旨 講演要旨集を発行します。発表申込があり次第、所定の原稿用紙（1,200字程度）をお送りします。

講演要旨原稿締切：昭和42年2月28日（火）必着